

第 15 回英語語法文法セミナー

テーマ「教員が知っておくべき英文法」

司会・講師 前川貴史（龍谷大学）

講師 山本修（大阪市立大学）

講師 出水孝典（神戸学院大学）

講師 吉田幸治（近畿大学）

日時：令和元年（2019年）8月5日（月）13:30～17:30

会場：関西学院大学梅田キャンパス 1405 室

（大阪市北区茶屋町 19 - 19 アプローズタワー14階）

プログラム：

13:30～13:40 会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明

13:40～14:20 前川貴史（龍谷大学）

「いわゆる『過去分詞』の前置修飾について」

14:20～15:00 山本修（大阪市立大学）

「所有格の読み」

15:00～15:10 -----休憩-----

15:10～15:50 出水孝典（神戸学院大学）

「動詞の意味分類—形の裏側には何がある？—」

15:50～16:30 吉田幸治（近畿大学）

「正用と誤用の境界—正誤の要因をめぐって—」

16:30～16:45 -----休憩・質問用紙記入-----

16:45～17:25 質疑応答

17:30 セミナー終了

参加費（資料代を含む）：2,000 円（当日、受付にてお支払いいただきます）

※ 本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですので、どなたでも自由に参加できます。会場収容人数（定員 80 名）の関係から、参加ご希望の方は英語語法文法学会ホームページにアクセスし、申込フォームに必要事項を記入の上、お申し込みください。申込み締め切りは令和元年 7 月 24 日です。先着順で受け付けます。必要な方にはセミナー受講証明書を発行いたします。

各講師の発表概要

いわゆる「過去分詞」の前置修飾について

前川貴史（龍谷大学）

英語の過去分詞の用法のうち、**the broken window** の **broken** のように名詞を前から修飾するものに焦点を当てる。学校では、この用法の過去分詞は「～された」・「～されている」という受身の意味を表すと教えられる。しかし一方で、**a fallen leaf** の **fallen** のように、自動詞の過去分詞形にも同様の用法が存在する。これらは自動詞由来のものであるので当然、受身の意味はない。そこで、名詞を前から修飾しているという点では等しいこれら2つのタイプの過去分詞を、異なる意味をもつ別個のものとして扱ってよいのかという問題が出てくる。

またそれに関連して、過去分詞の意味上の主語は何かという問題がある。分詞に修飾される名詞がその分詞の意味上の主語になると言われる。この見方によると、**the broken window** では **window** が **broken** の意味上の主語となる。しかし **his edited book** の場合、過去分詞 **edited** の意味上の主語は **book** であると言っていいだろうか？

これらの問題について、実際の用例を観察しながら考えていきたい。

所有格の読み

山本修（大阪市立大学）

この発表では、英語の名詞に関わる表現の中でも、とくに所有格表現に注目したいと思う。言うまでもないことであるが、話し言葉でも書き言葉でも所有格表現は頻繁に使用され、その用法も多様である。文法書や参考書を見てみると、さまざまな用法が列挙されており、これら数多くの用法を学習者に習得させるのが容易ではないことを体験されている方も多いと思う。これらの用法のうち、**A's B** と **B of A** の選択の問題、固有名詞と所有格表現の関連、名詞化 (**nominalization**) と所有格表現の関連などについて論じる。さらに、これらの用法と、さまざまな所有格の用法の中でもあまり注目されることがない独立所有格 (**absolute possessive**) との関連、たとえば **The choice is yours** や **Mary is mine** のような文についても触れたいと思う。

動詞の意味分類 —形の裏側には何がある？—

出水孝典（神戸学院大学）

英語の動詞の意味による区別として一般的に知られているのは、動作動詞と状態動詞というものである。しかしながら、動作動詞と呼ばれている動詞には、どのようにするのかは表しているがどうなるのかは表していない様態動詞と、逆にどのようにするのかは表さずどうなるのかを表す結果動詞の2種類がある。この様態動詞か結果動詞かという区別は、実は同じ動詞が他動詞と自動詞の両方で使われる場合の意味的な対応の仕方や、進行形で使った場合の意味、自動詞を過去分詞で使えるか否かといった点に関する違いと関係している。また、小説の描写などでは、様態動詞と結果動詞が一連の動作を分担して記述している例が見られたりするが、それを的確に理解するためにも、この区別は必要である。この発表では、様態動詞と結果動詞の区別に関して、上記の点に関する具体的な動詞や用例を取り上げながら、わかりやすく解説していきたいと考えている。

正用と誤用の境界 —正誤の要因をめぐって—

吉田幸治（近畿大学）

英語を用いた伝達を行う際、定型表現であればそれほど問題とはならないが、新規に語彙を組み合わせた表現を行う場合に、それが適格な表現であるか否かに関して判断に迷う場合がある。これに関連して、近年の学習用辞典・用法辞典などでは「○○とは言わない」「××は避けたほうがよい」といった非文情報が記載されている。こうした情報は、紙幅の都合などもあるために、非文となる原因についてはほとんど説明が与えられておらず、非文情報によって不適格であることを知ることはできるが、適格性を判断するための基準・要因は示されていない。

今回の話では、表現の正誤を判断する際に有益となる基準・要因を考察することにする。具体的には、(a)時間概念、(b)文化情報、(c)韻律情報などが語彙の選択とどのように関連し、言語使用の実態に対してどのように影響しているのかを示す。正誤判断に迷う事例に対してある程度まで説明が可能となるはずである。